

未見の園

散文の典型

いつにまでい

はじめて文に象った記憶は十のとき、うさぎの物語である。十のとき、と憶えているのは、書こうとしたのではないからだ。ただ、手が動いた。死んだ二羽のうさぎが、まなうらにいる存在が、無くなってしまったとおもえなかつたのだ。

柔らかくあたたかかつたはずの、毛のしたの膚が、かたくつめたい。音よりも気配に反応する俊敏な耳も、鎮まったままだ。いたちに追われたうさぎたちが、ともに数百メートルを駆けた心臓の鼓動をおもう。ふるえる腕のなかからだはあるのに、いない。なにが分かれたのか。いっぽうは何処にいったのか。空、かもしれない。

そうおもつたとき、左手に色えんぴつ、右手に鉛筆を握り、一心にかきはじめた。

絵と文とで綴じたその物語はもう手許になく、ふたたび読むことはかなわない。けれども、あの感覚を憶えている。見えなくなっても、無いのではない。それがなにか、知りたかつた。わからないから、かいた。教わりたくて、かいたのだ。なにからだろう。うさぎからか。読んでくれるだけかからか。

幼い問いのたしかさを、超えられずにいる。いや、そのまま抱えつづけている。最初からいつも、わからないからこそかきはじめたのだった。それがどんなかたちを生すのかなど、まるで知らぬままに。

深奥にねむる耳が、たちあがる。

ああ、あなたは、そこにいたんだね。

HL

いままでの

一番の

うさぎ